

# 文明研究に関する超領域人文学からの一考察

渡辺 青\*1, 平野葉一\*2

(\*1 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程後期満期退学, \*2 東海大学文学部ヨーロッパ文明学科)

[研究ノート]

## A Note on Civilization Studies from a Viewpoint of Trans-Disciplinary Humanities

Sei WATANABE\*1 and Yoichi HIRANO\*2

\*1 Ph.D. cand., Course of Civilization Studies, Graduate School of Letters, Tokai University

\*2 Department of European Civilization, School of Letters, Tokai University

Nowadays, civilization studies have been more and more important, because the present world is caught in two conflicting forces: the wave of worldwide globalization; and the movement for maintaining regional diversities. The global sustainability is declared as an indispensable slogan for our future. One of the problems here concerns the ideal situation of our civilization. If civilization can be considered as a set of human activities, we have to re-recognize how to grasp civilization. This aim cannot be achieved solely by discussing civilization with only one discipline; it is necessary to discuss by integrating various disciplines. Thus, civilization studies should not only be approached from inter-disciplinary perspectives but also from trans-disciplinary perspectives. In this article, we try to examine the necessity of trans-disciplinary perspectives by considering what it ought to be, and also try to propose the importance of Trans-Disciplinary Humanities as a key element to understand the feature of future civilization.

Accepted, Jan. 6, 2016

### §1. 問題提起

21世紀を迎え、世界はますます多元化に向かっているとされる。グローバル化の波が拡がるなか、世界は一方で政治、経済、健康、福祉などさまざまな面での地球規模的な協調を模索し、他方では宗教やイデオロギーの台頭、対立に直面している。同時に、人間の生活に“comfort”をもたらしてきた科学技術文明の展開は、その代償として諸々の地球規模的な問題を生じさせている。たとえば、温暖化による異常気象に代表されるような環境問題を考えてみれば明らかである。さらに、この科学技術文明の恩恵を享受するのが一部の人間であることは、別な対立の構造を生じさせている。果たして、人類は世界規模での安定した秩序を求めて喘ぎ、自らの生存、それも環境としての自然との共存というテーマを掲げて“持続可能”(sustainable)な世界の創造に躍起になっている。“戦争の世紀”であった20世紀を体験し、新たな期待のもとで迎えた21世紀は、まさに“混沌の時代”ともいべき様相を呈しているのである。

こうした混沌の時代にあっては、人類は二つの相反する方向性をもった問題への対処に迫られている。一方はグローバル化の展開であり、他方は多元性、多様性の保持である。実際、地球上の各地域には多種多様な文化・文明が今もなお息づいている。しかし、各地域における風土、気候といった自然環境、そのなかで培われてきた風習や生活様式に支えられた個々の文化、文明は、自らのアイデンティティの保持とグローバル化への適応という二つのベクトルの狭間で戸惑いを見せる。経済構造や社会システムの展開、あるいは技術導入という点でグローバル化は確かに一つの進歩、改革をもたらすが、地域に根づいた知識や知恵(indigenous knowledge)はその地域での環境との共存を可能にするからである。とくに、後者は、地球規模での“持続可能な”世界の維持に通じる。それが地球理解に対するさまざまな視点を提供する。

このように考えると、今日、文明研究の重要性は益々高まっていると思われる。それは、地域を特徴づけているのが、それぞれに属する人々の精神的営為、社会的営為、物質的営為であり、そうした人間営為の総体が文明を形成するからである。したがって、文明を人間営為の所産と考えるとき、過去から現在、未来へとといった時間経緯をとおして人間が築

本研究ノートは、『文明』投稿規定に基づき、レフェリーの査読を受けたものである。原稿受理日：2016年1月6日

いてきた、そして、今後も築いていくであろう文明について検証し、検討することは、それぞれの地域の在り方—延いては地球規模での人間社会の在り方—を見通す上で重要となる。さらに、これらの人間営為を複眼的に捉え、かつ、総合する研究手法もまた必要になる。そして、そのように構築される文明研究自体が「文明学」の一端を担うことになると考えられるのである。

しかし、こうした文明研究はそれ自体が一つの discipline を形成するわけではない。むしろ、種々の discipline を総合することが必要となる。それは単に個々の学問領域からの研究を結集させた複合領域研究 (inter-disciplinary study) というだけではなく、むしろそれぞれの学問領域を乗り越えて絡み合わせる研究手法—超領域研究 (trans-discipline study) が求められるのである。このような方法は、既に神川正彦によって提起されている。神川は、知の在り方を discipline から inter-discipline へ、さらには trans-discipline へと転換させることの必要性を説き、比較文明学を trans-discipline なるものとして位置づけている<sup>1</sup>。また、2001年に改組改編された東海大学文明研究所の松本亮三初代所長は、2004年に開催されたシンポジウム「文明研究のランドスケープ」において、神川の議論を引きながら「…単に諸学の協働であるインターディシプリンではなく、それらの壁を取り払い、諸学を積極的に連ねて繋ぐトランスディシプリンが必要であるということになる…」と述べている<sup>2</sup>。

上の指摘をふまえると、文明研究の底流をなす「人間とは何か」という問いかけに対しても同様の視点が浮かび上がる。それは、人間と社会が環境としての自然との関わりの中かでいかなる文明を形成し得るのかといった問題に対し、そうした文明が依拠する人間の価値意識を探ることにつながる。本稿では、上の trans-discipline への展開を基礎に、文明を形成する人間の価値意識を、ときとして根底から、また、ときとして多種多様な文化、文明の比較から考察するための新たな人文学 (humanities) —すなわち、人間存在と人間営為について総体的に研究する一つの手法としての「超領域人文学」(trans-disciplinary humanities) —構築の可能性について検討する。

## §2. 文明研究の方向性— trans-discipline として

「文明研究の対象は文明である」—これは一つの tautology

に過ぎない。すなわち、文明研究の根底には常に「文明とは何か」という問いが存在する。また、文化と文明のそれぞれが何を意味するのかといった問いも常に提起され、歴史的にもその議論には枚挙に遑がない。

歴史的には、「文明」という概念は「野蛮」あるいは「未開」との対比によって用いられてきた。かつてヨーロッパ世界は、「白人であること」や「キリスト教徒であること」をもってヨーロッパ以外の世界を区別し、そこに自らの優越性を認識したのである。こうした人種や文化からの区別—ある種の「差別」—について、加藤泰は、「他者」が何であるか、そのアイデンティティを作り上げる基準は、「自己」が何であるかという基準を用いるしかなかった…中世ヨーロッパの人々が、「われわれ人間」というものを、キリスト教徒であり、…野人とは異なるものとして理解していたら…」と指摘する<sup>3</sup>。さらに、啓蒙主義による人間の普遍性と平等という思想が、「野蛮=未開」がやがて「文明」に到達するとして、「西洋/非西洋」を時間化したものが「文明/未開」の言説であるとす。結局、ヨーロッパ中心主義の下に「野蛮=未開」に対するヨーロッパの「文明性」といった対比が構築され、これがヨーロッパの「文明」による「野蛮」の教化につながり、18世紀の啓蒙主義を経て帝国主義へと展開することになる。

こうした「野蛮」との対比としての「文明」はヨーロッパ中心主義という歴史経緯の一断面に過ぎないともいえるが、多少視点を転換すれば、ヨーロッパにおける「近代文明の成立」もある意味では同様な脈絡で捉えられる。そして、それは現代文明を考える上でもかなり大きな問題を内包する。すなわち、17世紀の科学革命およびそれを受けた18世紀の啓蒙主義の下では、科学的な思考、方法論と相俟って合理性の世界が展開される。この「近代文明」は、やがて技術と結びつき、「野蛮」との対比としての自己認識という以上に、その後の人々や社会に影響を与える。いわゆる科学文明の登場であり、それは現在の科学技術文明へと結実する。そこでは、合理性、利便性、有効性などといった特徴が人間をして“科学技術謳歌”へと向かわせ、果たしてこの文明は世界を凌駕するかのごとく展開する。これは現代文明に対する一つの捉え方であるが、上のような視点から考えれば、この「文明」はヨーロッパ中心主義の衣を人間中心主義に着せ替えて形成された“monoculture”的な集合体であり、やがては環境としての自然を阻害し、人間自らがそのなかで存在の危機を迎

えることになる。

上のような「文明」の捉え方がヨーロッパ中心主義を基礎としていることに対する批判と反省は、1955年のレヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』に対するヨーロッパの人々の衝撃に見てとれる。それまでの理性万能主義がもたらした「文明」の豊かさは、必ずしも精神や理性の崇高さを示すものではなかったのである<sup>4</sup>。もはや、「文明」概念は優劣の問題ではなくなる。これは、「文明」を捉える視点の変化を如実に表す一例であるが、今日では「文明」は人間が形成する集合体の特徴、容貌として捉えられる。斎藤博は、文明は「人間営為の総体」として規定されるとする<sup>5</sup>。ここで、「人間営為の総体」とは「人間が営み為してきたことすべて」を指すから、人間が一つの共通の価値によって集合体—すなわち社会—を形成すれば、そこでの価値意識、社会システム、衣食住に関わる人間を支える技術などといったすべてが文明を形成することになる。したがって、それぞれの集合体どうしに優劣を論じる必要はなく、そこに価値評価は伴わないのである。実際、こうした文明の捉え方は、文明研究の重要性を感じさせる。人間が形成してきた一つひとつの集合体としての文明に対し、それ自体を共時的 (synchronic) に検討し、その上で、それぞれの文明の様相を通時的 (diachronic) に比較検討することができるからである。そこでは、人間営為の意味が問い直されることになる。

人間営為としての文明の捉え方として、伊東俊太郎は「文化と文明の相関モデル」を提示している<sup>6</sup>。そこでは、ある地域の集団の生活様式を「生活体」と称し、それを一つの球体を成すモデルとして提示する<sup>7</sup>。この球体は文明としての「外殻」(outer shell) と文化としての「内核」(inner core) の二層から構成される。ここで、「文明」はその生活体における人間営為に必要な「制度、組織、装置」と規定される。他方、「文化」は「慣習的な生き方」あるいはその生活体が備えるエートス—価値観、観念形態、考え方など—と定義される。すなわち、「内核」は、その生活体に生きる人々がそのなかで“必然として” 培われた価値意識を基礎とする。したがって、そうした価値意識の下での人々の営為の反映として「外殻」の文明が形成される。ここで、これらは相互に作用し合うが、外殻の文明はその生活体に属する人々の生活様式を規定する。すなわち、文明が内核の文化に絶えず影響を及ぼすことになる。

さらに、伊東は、生活体の外殻の文明が外部の他の文明にも働きかけるとし、異文明間の「接触」を論じる。すなわち、異文明間の「ぶつかり合い」による「文明接触」(civilization contact) である。その結果、相互の文明の交流、あるいは一方から他方への文明の移入—「文明移転」(civilization transfer)—が生じる。ここで興味深いのは、「内核」としての文化と「外殻」としての文明の関係性である。一つ的生活体においては、一度文明が形成されると、それは内核にある文化から独立 (文化剥離) するという。そして、外殻にある文明が他の生活体との「文明接触」により一方から他方へ移されると、生活体の内部では外殻の変化が内核の文化にも影響を及ぼし、ときとして文化変容をもたらすというのである。

上で述べた斎藤による文明の定義にしても、また、伊東による文化と文明の相関モデルにしても、文明は、「自らが属する集合体における人間営為の総体」として位置づけられる。この定義からすると、文明研究は必然的に trans-disciplinary な性質を備えることになる。たとえば、具体的な人間営為として経済、芸術、文学、工芸、医療などを考えてみる。その際に、個々の営為はそれぞれが個別の discipline のなかで議論され、判断される。しかし、こうした人間営為が総合されて社会が築かれ、文明が形成される。したがって、人間営為の総体としての文明を論じるには、これらの discipline を複眼的に組み合わせることが必要になる。その意味では、主として個々の discipline による理解を深め、それを持ち寄る inter-discipline では必ずしも十分ではないと思われるのである。

こうした trans-discipline の必要性に関しては、松本亮三が、神川正彦の方法論を引いて、比較文明学の今後の展開として次のように述べている。

「一九世紀ディシプリンを尊重しつつも、その学問的限界を超えた総合と融合が必要である。神川氏の言う「接合の論理」であり、インターディシプリナリーを超えた、トランスディシプリナリーな学としての、比較文明学の構築が望まれる。トランスディシプリナリーであることには限界があってはならない。…自然を単に人類文化や文明の側からのみ捉えて解釈するのではなく、自然事象、人文社会事象の境界を取り払うことで、全体を見据えなければならない。」<sup>8</sup>

### §3. Trans-Disciplinary な研究手法

前節で述べたように、文明研究にとっては trans-disciplinary な研究手法は必要であり、かつ有意義である。しかし、そうした研究がどのようにして実践可能であるかは常に問題となる。逆に、文明研究自体が常に同様の問題を有しているとも考えることができる。すなわち、人間営為を個々に見るのではなく、総合として見るためにはどのようにすればよいかという問題である。以下では、学際的研究領域である認知科学と比較してこの問題の検討を試みる。

認知科学は1950年代のアメリカにおいて成立したもので、人間の心や人間の認知（認識）の仕組みを対象とする学際的分野である。ここでは、心理学、言語学、神経学、人工知能、遺伝子工学、哲学、美学、経済学といった諸々の discipline を横断する形で研究が進められる。しかし、学際的手法とはいっても、inter-disciplinary な研究と trans-disciplinary な研究との境界は必ずしも明確ではない。強いていうなら、「認知意味論」や「認知美学」、「行動経済学」などといった個別領域においては新たな展開が見られ、inter-disciplinary な研究が行われている。他方、trans-disciplinary な研究の可能性としては、哲学的な基礎理論や、認知科学の下位領域としての「認知意味論」など、種々の理論が総合される形で人間の心の仕組み全般についての議論が行われている<sup>9</sup>。

認知科学における trans-discipline としての研究の特徴は、「認知能力」と呼ばれるキーコンセプトが共有されている点である。これは、人間の心は生得的に基礎づけられた能力であることを前提として設定された概念である。この「認知能力」がキーコンセプトとして共有されることで下位領域にあるそれぞれの discipline が総合され、結果として認知科学が学際的分野として成立し、成果を上げることができていると思われる。しかし、実際には inter-discipline と trans-discipline の厳密な規定はそれほど重要視されておらず、むしろそれぞれの方法が相乗効果を生み出すところに認知科学の成果が見られると考えられる。

認知科学の構造との比較から trans-disciplinary な文明研究の可能性を検討するなら、ここで重要となるのは、文明研究におけるキーコンセプトの設定である。人間営為の総体が文明を形成すると考えると、ここでは「諸々の人間営為に共通し、それらの営為を成立させている何か」をキーコンセプ

トとして設定することが必要になると思われる。しかし、これはそれほど単純な問題ではない。何故ならば、人間諸営為に共通するもの、ないしはその根源的な原動力の探求は、19世紀から20世紀にかけて哲学の対象としてさまざまに議論が重ねられてきたからである。たとえば、ホイジンガはそれを「遊び」とし、マルクスは「経済的本能」とした。また、フロイトでは「性的衝動」になるであろうし、ニーチェには「権力への意志」となる。

この「人間営為に共通するもの」としては、「シンボル」を挙げることもできる。実際、カッシーラーは「シンボル操作」を取り上げて、人間の文化活動全般は「シンボル操作」という概念のもとにすべて説明することができるとした。言い換えれば、人間をしてシンボルを操る動物と捉えたのである。同様に、ランガーは、「シンボル」を現代の最も創造的な概念であると位置づけている。こうした見解は、「シンボル」そのものの捉え方に依拠することはいうまでもない。少し乱暴な見方をすれば、人間が知覚する（あるいは認識する）対象を「シンボル」と称すれば、人間の精神に訴える対象の多くがこの範疇に分類されることになる。実際、生松敬三は「シンボル」という概念が影響を与えた思想や研究を以下のように列挙して検討している。

「フロイトやラカンの精神分析、ユングの深層心理学、フッサールの現象学、ゲシュタルト心理学、ウェルナーやカプランの有機体論的発達心理学、ヘッド、ゲルプ、ゴールドシュタインらの神経生理学理論、精神病理学、ポイテンディクらの動物心理学、ヤーキズ、ハンター、ローレンツらの動物行動学、ベルタランフィのシステム理論、文化人類学、ヘルツの物理学理論、記号論理学、ホワイテッドのシンボリズムの哲学、デューイやミード、モリスらのプラグマティズム、オグデン／リチャーズの意味論、ソシュール、ヤコブソン、バンヴェニストらの言語学、実に多様な方面での記号学・記号理論、美学・美術史、バシュラールの詩的言語論、シェーラーやメルロ＝ポンティの現象学的人間学など、ほとんど知の全領域でこの「シンボル」の概念は決定的な役割を果たしている。」<sup>10</sup>

上の引用を見ると、文明研究のキーコンセプトはまさに

「シンボル」として設定し得るとも感じられるが、この辺りはおも検討すべき問題と思われる。それでも、文明研究のキーコンセプトを設定することを考えると、一つの可能性が見えてくる。それは、文明を形成する集合体における「人間諸営為に共通するもの」として、人間精神の認識が挙げられる点である。それは、おそらく人間自身の基礎として人間の内奥に向かう価値意識に通じる“何もの”かではないかと推察される。ここに人文知の存在が垣間見られるのであり、それは本研究が目指す超領域人文学 (Trans-Disciplinary Humanities) に通じると思われるのである。

#### § 4. Case Study I : 文明研究と日本における近代の超克の方向性

文明研究はそれ自体 trans-disciplinary である。それは文明が「人間営為の総体」であるということからの必然である。以下では、こうした研究の Case Study として、日本における近代の超克の問題について検討を試みる。

trans-discipline は、学問の極端な専門化と対立する。学問の専門化はルネサンスに始まり 18 世紀に確立する近代科学と結びつく。したがって、文明研究は本来、近代を乗り越えようとする「近代の超克」を目的としていることになる。

日本の近代化は、西欧近代の模倣として出発した。このため、日本における近代の超克は西欧を批判することによって達成されると理解された。近代化の限界、地方の疲弊、農村の荒廃、労働者の過酷な状況など、が意識されるとき、日本では西欧対アジア、物質対精神、文明対文化という構図のもとに、前者を攻撃する形で近代の超克が唱えられた。近代の限界は大正半ばには顕在化し、近代超克の思想は太平洋戦争の勃発に合わせて頂点を迎えた。しかし、戦後には、近代の超克の思想はファシズムへの同調として批判され、急速に影響力を失うことになる。

戦時下の日本において、文学界は「近代の超克」に関する座談会を開催した。多くの知識人が近代の超克すなわち反西欧、主戦の立場を打ち出す一方で、下村寅太郎の近代の超克に関する見解は独自のであった。その見方は西欧批判としての近代の超克は安易であり、文明対文化、機械対精神、外的対内的という二項対立は確たるものではないとする。むしろ近代を特徴づける本質は客観的観念論というイデアリズムで、近代科学を特徴づける実験的方法もまた、自然として

は存在しないものを現出させようとする—すなわち自然を拷問にかけて口を割らせ主観によって把握できるようにする—という意味においてこれと精神的には同質であるというものである。それはまた科学と魔術 (マジック) との精神的な共通性を示すものであり、近代的な機械はこのような精神によって生み出されたとされるのである<sup>11</sup>。

亀井勝一郎によれば学問(学問だけでなくあらゆる仕事)の専門化は全人性—知識、感情、意志の調和のとれた人の性質—の喪失であるという。亀井にとってこのような状況は大きな問題となる。下村は積極的な学問の専門化は各分野の醇化として近代の積極的な性質として捉える。しかし、同時に専門化および分化は終局的なあり方ではなくて、統一が必要であると認めている。ここに、下村の考える近代の超克の方向性が見られる。ただし、その統一がどのようになされるのかについての議論はこの時点ではなされていない。

文明研究がその対象を「人間営為の総体」として定義したとき、あるいは再定義したとき、その目的としての近代の超克は下村寅太郎の考えた方向性と一致しているように思われる。斎藤博は「文明学の方法はイデオロギー批判であった」<sup>12</sup>と記している。そして、今日の文明研究の方法は trans-discipline であり、何らかのイデオロギーを批判するものではない面も備えている。文明研究は下村の近代の超克という意味において、先鋭化する学問の専門性を批判し、それぞれの discipline を超越する方法を探求し続けることになると思われるのである。

1977 年、下村は総合研究の重要性を改めて説き、ブルクハルトの研究方法の中に総合研究の実践のためのモデルを見出そうとした。「ブルクハルトは『世界史的考察』で、自分は歴史の時間的な展開とか発展とかを問題にせず、もっぱら横断面の記述をする。「繰返すもの」、「ティピッシなもの」、「コンスタントなもの」、「連続的なもの」を目標にすると言っている」<sup>13</sup>。あるいは、「芸術家とその作品の個性的な記述を全く意図せず、一つの時代の芸術的製作を導いた課題と芸術家の製作を支配した原則を探求することを意図するもの…」<sup>14</sup>などである。こうした下村による指摘は、文明研究を実践する上での指針として貴重であると思われる。

## §5. Case Study II : 文学研究の展開

前節に続く Case Study として、本節では trans-disciplinary な研究はどのように位置づけられるかという主題について文学研究の枠組みにおいて議論する。ここでは最初に discipline とはどのような概念なのかを、知の仕組みの歴史を通して理解し、その概念特徴と限界を明らかにする。この限界を超えるという意味において trans-disciplinary な文学研究は具体的に位置づけられると思われるからである。しかしながら、現在そのようにして位置づけられる trans-disciplinary な文学研究は発言力を失いつつあるように見えることも事実である。ここに trans-discipline という概念について改めて検討する必要性が生じると思われる。

discipline は西洋の近代化、すなわち啓蒙思想の普及、国民国家の形成、資本主義的経済競争といった歴史的状況下に適応すべく新たに生み出された、知識を創造し、保存し、伝達・共有するための組織形態である。discipline という言葉には「規律」と「専門分野」のふたつの意味があり、前者は教育、後者は研究と関係づけて捉えることが可能である。したがって、今日大学と呼ばれている高等教育施設は研究と教育の両方の役割を同時に果たしているという点で極めてディシプリナリーな知的機関であると言える。

今日の大学のモデルはベルリン大学である。この大学は 1810 年、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト (Friedrich Wilhelm Christian Karl Ferdinand Freiherr von Humboldt : 1767-1835) によって、プロイセン王国における教育改革の一環として創設された。フンボルトによる教育改革は新人文主義を基礎とする精神修行 (ビルドゥング) を理念として、初等教育の義務化と中間教育施設としてのギムナジウムの設置、およびベルリン大学の創設という階層的な構造をなしている。各ギムナジウムには古典文学のセミナーが設置され、ギリシア語の読み書きができる古典教養を身に付けたカリキュラム修了者は、少なくともギムナジウムにおいて教職に就くことが可能となっていた。

「西洋では、啓蒙運動によって、大規模な知の市場がはじめて誕生するとともに、今日「専門分野」と呼ばれている知的な労働の専門化が始まった。」<sup>15</sup> 中産階級の経済的台頭と啓蒙思想の広がりによって、知は一つ上の社会階級に成り上がるための実用品としての意味をもつようになった。質の高い知

識と教育への需要は教授や講師たちによる聴講者獲得競争と大学間における教授獲得競争をもたらした。各大学による優秀な人材の争奪戦は、彼らの望む分野にポストを設置し、教授たちはセミナー形式を用いて弟子たちを教育することによってその分野を育成した。このようにして専門分野は諸大学の内に広がり、今日における大学の知的組織の形態が基礎づけられたと考えられる。

discipline が最初に成功した領域は、ギムナジウムにおいて用いられた文献学的方法、すなわち精読を直接使うことのできる人文学の領域であった。しかし、精読と原典考証に拘泥するほどに、人文学はフンボルト的理念から乖離し、ペダンティックな語学的穿鑿を行うアカデミック・フールとして批判されるようになる<sup>16</sup>。一方で 19 世紀中期、リービヒ (Justus Freiherr von Liebig : 1803-1873) によってギーゼン大学に実験室が併設され、有機化学が discipline 化を成し得たことを契機として、知の主たる関心の対象は文献から物へと移行することになった<sup>17</sup>。19 世紀が進むにつれて discipline の概念から新人文主義的なビルドゥングという意味が後景化し、それは社会に利益をもたらすための自律した特殊な知の体系を指す言葉へと変化していったように思われる。このような discipline の意味の変化は、それを西洋における近代化に対応する知的装置として理解しようとする見方にとって複雑な問題を提示する。特に古典文学の墮落と自然科学の台頭を受けて、実験的な方法を用いて人間や社会を対象に新たに開始された人文学領域の discipline を考える際には微妙である。これは社会学系の discipline に限ったことではなく、文学研究においても当てはまる。それというのも、20 世紀の初頭にはロシア・フォルマリズムとして自然科学をモデルとする文学研究が現れてくるからである。

ロシア・フォルマリズムは 1915 年頃から 20 年代末ごろまでに文学研究の科学的自律を掲げて活動した言語学者、民俗学者、文学研究者からなる研究グループである。彼らの業績は今日の文学理論の原点とされ、後の構造主義の源流のひとつと目されている<sup>18</sup>。フォルマリズムにおいて文学研究は作者中心の研究から作品中心の研究へと移行される。すなわち、テキストを介して作者の思想や意図を正確に読み取る従来の文献学的方法からはなれ、作品がどのように作られているのかを、テキスト分析から理解しようとするところに彼らの特徴がある。彼らにとって詩人は天才ではなく匠であり、

フォルマリストのひとりには「たとえプーシキンがいなかったとしても『エヴゲニー・オネーギン』は書かれたであろう」<sup>19</sup>とさえ述べている。こうして文学研究は曖昧な作者の内面や他者の意識を読み取ることや、天才という神秘的説明を離れて、文学研究に客観性を導入し、詩を誰でも作り出すことのできる工芸品として捉えた。実験室では器具の使い方を習得すれば、誰でも成果を出すことができたように、文芸作品もその作りさえ分かれば、誰にでも創ることができるのである。このようにロシア・フォルマリズムに至って、文学研究はようやく自らを、自律的な科学の discipline として意識したと考えられる。ここから、disciplinary な文学研究という言葉は、作者の意図を正確に読み取ろうとする伝統的な文献学的研究としても、作品がどのように作られているかを見ようとする構造主義的な研究の系譜としても、理解することができる。

反近代的な思想としてポストモダニズムが流行し始める1960年代後半以降は、いずれの disciplinary な文学研究も、読者の視点が欠けているとする視点に立脚した読者の主観に重きを置いた立場が主流となった。このようなポストモダニズム時代の文学研究は、文学作品を対象とした最初の trans-disciplinary な研究と位置づけることができると思われる。一義的な解釈に反対し読者の自由な解釈を創造性として認めるこの時代の文学研究は、理論家と呼ばれる人々が諸々の学問領域を横断しながら作り出した哲学的な著作を拠り所として推し進められた。しかし、こうした越境行為が1990年代末に知の欺瞞として厳しい批判を受けたことから、この新たな文学研究は以前ほどの隆盛を誇っているとは考えにくい。ここに、trans-disciplinary な研究の新たな意味づけを検討する必要性が生じている。discipline が西洋近代化の歴史状況に対応した知のシステムとして理解される以上、trans-disciplinary な研究は disciplinary な研究の限界を超えるものとして反近代的な属性をもつものになるのは自然のこのように見える。しかし、今日ポストモダニズムが批判され停滞している状況において、trans-disciplinary な研究を反近代的思想の上に形成される学的方法として即座に規定することには一定の留保が必要であると思われる。trans-discipline は“discipline”（近代）と“反 discipline”（反近代）ではなく、この二項対立の解消を模索するものとして改めて議論される概念ではないだろうか。下村寅太郎は戦前近代の超克に関する

座談会に寄せた文章の中で、近代を単に消極的に捉えるのではなく、その積極性を承認した上でその止揚を考えることこそが近代超克の方向性であると示している<sup>20</sup>。こうした方向性は、trans-discipline という概念を再検討するための重要な指針となるように思われる。

## §6. Case Study III：数学の文明性

本節では、trans-disciplinary な研究の Case Study として、数学の文明性について一試論を紹介する。それは、数学とはいかなる discipline を形成してきたのかという問いに対し、人間による文明営為との関連として数学の形成史を眺める視点を提示する試みである。

数学の歴史を検討する際には、3つのアプローチがある。“internal history”（内的理論史）は数学の諸概念や諸理論の歴史的展開を意味するが、これは数学が人間精神の創造に関わるが故に高度な精神性に関わる問題となる。“external history”（外的要因史）は人間営為の結果である組織、社会、制度などが数学の展開に与えた影響を論じる。そして、人間の精神性から生じる数学と実際の間営為とを有機的な結合として眺める視点として“total history”（全体史）がある。

グラビナー（J. V. Grabiner）は、1974年の論文<sup>21</sup>において数学史において明確に“total history”の重要性を提示した最初の一人である。グラビナーはまず「数学的真理は時間に依存するか？」という問いを提起する。そして、数学が時代や地域によって性格を異にすることを例証する。とくに顕著であるのは、18世紀の微分積分学が厳密な理論的証明より結果を重んじることを、科学革命直後の時代の特徴として示す。また、バークリー（G. Berkeley: 1685-1753）の見解を引きながら17世紀当時の極限概念の曖昧さを述べた<sup>22</sup>上で、18世紀から19世紀にかけての微分積分学の展開が論理性という点で厳密性をもたないことも指摘する。こうした議論から導かれるのは、たとえ人間の精神活動に大きく依存する数学であるにしても、時期や地域に応じて具体性や抽象性を重視する度合いが異なり、得られる“真実”の形式や度合いも異なるという事実である。

グラビナーの主張は、数学は“普遍的な真理”を時代を追って順当に積み重ねて形成されてきたわけではない点にある。むしろ、極論すれば、それぞれの時代や地域における“真理”が人々や社会の価値に依存しながら求められてきたことにな

る。グラビナー自身の言葉では、「数学は革命の変革をもたない唯一の学問なのではない。数学もまたそうした変革をもつ“人間営為”であり、その変革は破壊的ではないにしても最も基本的な革命的变化ということができるのである」となる。このグラビナーの視点こそが数学史における全体史的アプローチを象徴しており、同時に、trans-disciplinary な数学史の重要性を示唆しているのである。<sup>23</sup>

上で述べたグラビナーの視点は、数学そのものの歴史的展開に向けられたものである。言い換えれば、それは、数学における“真理”の在り方に関する議論である。その一方で、数学の文明性という点では数学の歴史経緯と人間営為との関わりをふまえた見方が必要となる。数学が人間営為や社会の在り方に関わるのであれば、数学自体が人間精神や人間の社会活動などを反映した結果となる。そして、その逆として、それぞれの地域、時代の数学は当時の人間営為に影響を与え、それを方向付け、あるいは規定すると考えることができる。すなわち、数学自体がそれぞれの時代の人間営為に組み込まれ、数学が一つの discipline として特化するのではなく、時代や地域における社会のなかに意味づけられることになる。すなわち、数学もまた社会という価値の総体のなかで共時的に捉えられることになる。

こうした例として考えられるのが、“ethnomathematics”（民族数学）である。“ethnomathematics”は「民族数学」であり、一般的には、西欧で形成された universal mathematics（普遍数学）と対比する。すなわち、諸地域において独自の形式で展開してきた地域数学を指す。“ethnomathematics”のこうした原義に対し、数学史および数学教育の研究者であるダンブロシオ (U. D' Ambrosio) は次のように述べている。

「[人類学者たちと]文化史や数学史の研究者の間に関係づけを認識するならば、それは形式の異なった数学をもたらしてきた種々の思考法の存在を認める重要な一歩である。こうした試みこそ民族数学 (Ethnomathematics) と呼ぶことができるであろう。」<sup>24</sup>

これから、異なった地域や文化の下で展開された数学は、単に形式的な問題としてだけではなく、むしろより深淵にある人間の思考法に関わるという点で特徴づけられることになる。したがって、ethnomathematics という視点は、人間精神

が築いてきた数学の姿を浮かび上がらせると同時に、数学を携えた人間の諸営為の結果としての文明をも明らかにすると考えられるのである。

「…数学はその発展過程においては個々の文化や社会に通時的にも共時的にも依存するような空間を形成してきたとみなすこともできる。すなわち、時代や地域に応じて数学が一つの価値空間を形成し、それぞれの空間ごとにその意味も異なっていたのではないか…こうした視点から数学を見る分野に民族数学 (ethnomathematics) があるが、これは個々の地域における数学の様相を把握することで数学の意味を探究するだけでなく、数学を通してその地域の文化や文明を理解することを可能にすると考えられている。」<sup>25</sup>

現在のような論理的、抽象的な数学はそれ自体普遍的である。しかし、その形成過程において見出されるさまざまな様相には、数学と人間営為との関わりが見え隠れする。それは同時に“数学の文明性”を垣間見ることでもあり感じられるのである。

## §7. おわりにかえて—超領域人文学 (Trans-Disciplinary Humanities) の可能性

かつて、14世紀から16世紀にかけて興ったイタリア・ルネサンスは、古代ギリシアやローマの古典文化を復興させた。これは「文芸復興」とも称され、その範囲は思想、文学、芸術、建築など他分野に亘るが、他にも種々の学問や技術までもが対象となっている。古典文化の復興から「ルネサンス＝再生」(Renaissance) と呼ばれるが、キリスト教の神性に基づいた世界観から人間性を解き放ち、人間の現代的、世俗的な価値意識を呼び起こしたという点で人文主義 (humanism) の立場が大いに尊重されたことで知られている。また、後のヨーロッパ近代の基礎を築いたとされる。その一方で、第5節で述べたとおり、18世紀末から19世紀にかけてのドイツでは古典世界の学問を尊重する新人文主義による教育改革が行われた。これは、古典文献学への回帰を中心とする動きであった。

しかし、これらの人文主義および新人文主義を考えると、17世紀から18世紀にかけての科学革命による近代科学の成



立および科学思潮を中心とする啓蒙主義とその延長のなかで、いずれもがその使命を終えているように見える。それは、ある意味では discipline の台頭が人文主義を追いやっているかのごとくである。

discipline が近代を象徴するとき、文明研究はまさに 19 世紀的な近代の超克を目指す。それは、一つの意味で近代科学が築いてきた科学文明を批判する試みでもある。そして、今日的な意味では、文明研究は同時に行き過ぎた科学技術の将来を憂い、展望する試みでもある。第 3 節で見たように、人間営為の総体としての文明を考える上でのキーコンセプトが人間精神に深く刻まれた“何もの”かであるならば、「人間とは何か」、「人間とはいかなる存在か」という問いは重要な意味をもって来る。我々に対しては、その問いが人間精神の在り方の検証を意味するからである。そして、そのためには人間精神の価値意識を再考する人文知の再構築が求められるのではないと思われるのである。

本稿では、Case Study として、日本における近代の超克、文学研究の展開、数学の文明性について試論を展開した。そのいずれにも共通するのは、それぞれの母体となる集合体における人間精神の問題である。したがって、人間営為の総体としての文明の検討には、思想的、哲学的な思考を含む人文知を展開させなければならない。ここに新たな超領域人文学 (Trans-Disciplinary Humanities) の可能性が見てとれるのである。地球規模で展開しているグローバル化のなかにあつて、自然との共存をはかりながら自らのアイデンティティを保持し、人間精神の復興を目指すこと、それは 21 世紀にあつて新たな Renaissance を目指す意識につながるのではないだろうか。

## 注

- 1 神川氏の論考としては、たとえば以下を参照のこと。  
神川正彦、「比較文明学の現代的課題—21 世紀への展望のもとに」、『比較文明』、第 10 号、比較文明学会、1994 年  
神川正彦、「比較文明学の方法」、伊東俊太郎編『比較文明を学ぶ人のために』、世界思想社、1997 年
- 2 ここでは、以下の文献から引用した。  
松本亮三、「序章 文明を考える」、東海大学文明研究所編『文明への視座』、東海大学出版会、2006 年
- 3 加藤泰、「第 1 章 人間の差異と同一性—近代における「人種」と「文化」の言説」、加藤・金子・元田編著『近代の知を読み解く』、東海大学出版会、2001 年
- 4 平野葉一、「第 4 章 科学の普遍性に対する錯覚」、加藤・金子・元田編著『近代の知を読み解く』、東海大学出版会、

2001 年

- 5 齋藤博、『文明への問』東海大学出版会、1979 年
- 6 このモデルは、伊東俊太郎氏の以下の講演録に示されている。  
“Second International Seminar on Civilizational Dialogue” (2-3 September 1996, Univ. of Malaya) における Keynote Address
- 7 伊東俊太郎、「二十一世紀の文明共存へ—『文明衝突説』を超えて』伊東俊太郎著作集 第 8 巻、比較文明論 II』、麗澤大学出版会、2008 年
- 8 松本亮三、「総合知としての比較文明学—その構築に向けて」、比較文明学会 30 周年記念出版編集委員会編『文明の未来—いま、あらためて比較文明学の視点から』、東海大学出版部、2014 年
- 9 たとえば、以下を参照のこと。  
ピンカー『人間の本性を考える—心は「空白の石版」か』山下篤子訳、日本放送出版協会、2004 年  
(Steven Pinker, *Why nature & nurture won't go away.*, “Dædalus”, Fall, 2004)
- 10 生松敬三「カッシーラー『シンボル形式の哲学(一)』生松敬三、木田元訳、岩波文庫、1989 年、訳者あとがき」
- 11 下村寅太郎、「近代の超克の方向」河上徹太郎他『近代の超克』、富山房百科文庫、2010 年  
本書の pp.115-116 に以下のように述べられている。  
「(近代科学の実験的方法) の認識目的は本質形相の直観ではなく、自然の可能性の展開にある。近代的機械はその所産である。これは自然の再編成、或いは寧ろ自然の作り替へであつて、単に自然の応用や利用ではない。この近代的機械の形成に於いて成立するのは、単に自然からの主観的な独立、主観的な自由でなく、真に客観的に自由になること、客観的独立である。…近代科学の精神的系譜は唯物論でなく、このやうな観念論である。観念論は、存在の直接性を承認せず、凡る存在を常に主観に媒介されたものとしてのみ承認する精神だからである。」
- 12 齋藤博「文明の方法」『文明研究』所収
- 13 下村寅太郎「ブルクハルトの文化史について」『文明 19 号』東海大学出版会、1977 年  
なお、総合的研究の重要性は次のように説かれている。  
「一般に現代の学問の専門化、Specialization の結果として自然ではありますが、歴史家は美術史家ブルクハルトをあまり重んじず注意しない、逆に美術史家はブルクハルトの美術史だけを問題にする傾向があつて、ブルクハルトを全体として理解せず、ブルクハルトにおける文化史と美術史を別々に考え、両者の関係や、ブルクハルトの意図していた両者の融合とか総合をあまり問題にしていない。そういう立場ではブルクハルトの文化史そのものの理解も一面的になり、逆に美術史も文化史との連関において理解されないと、ブルクハルトの美術史のもつ意味も十分に理解されないと思います。」
- 14 下村、上掲書。
- 15 イアン・F・マクニーリー、ライザ・ウルヴァートン、『知はいかにして「再発明」されたか—アレクサンドリア図書館からインターネットまで』、富永星訳、日経 BP 社、2010 年
- 16 佐々木力『科学革命の歴史構造(下)』講談社学術文庫、

1995年

- 17 有機化学は今日ではインターディシプリナリーの典型として紹介されることがあるが、19世紀中期における自然科学の領域では、disciplineは有力な科学者によって作り出されている最中であり、この点からは有機化学をインターディシプリナリーな研究の祖とする見方は、今日における課題を背景とする現代的な見方として理解できる。
- 18 桑野隆「ロシア・フォルマリズム」『言語論的転回 岩波講座現代思想4』, 岩波書店, 1993年
- 19 オシップ・ブリーク「いわゆる『形式的方法』について」松原明, 大石雅彦編『ロシア・アバンギャルド7——レフ芸術左翼戦線』, 国書刊行会, 1990年
- 20 下村寅太郎「近代の超克の方向」『近代の超克』富山房百科文庫, 2010年
- 21 Judith V. Grabiner, "Is mathematical truth time-dependent?", *The American Mathematical Monthly*, Vol.81, No.4, 1974, pp.354-365.
- 22 極限概念をめぐるバークリーのニュートン批判は以下の文献を参照のこと。  
ジョフリー・カンター「反ニュートン主義」, フォーベル編, 平野他訳『ニュートン復活』, 現代数学社, 1996年
- 23 グラビナーの全体史的アプローチに関しては以下を参照のこと。  
坂本・平野「数学の文明性についての一考察—ユークリッド『原論』をめぐる」, 『文明研究』, 東海大学文明学会, 第27号(2009年)
- 24 Ubiratan D'Ambrosio: Ethnomathematics, the Nature of Mathematics and Mathematics Education, *Mathematics Education and Philosophy*, The Falmer Press, 1994
- 25 平野葉一「Trans-Disciplineから見た科学・数学」, 『文明』, 東海大学文明研究所, No.7(2005)